

メディケアプラザ中央通り 広報誌

あ お ぞ ら

2026. 6月

Vol. 06



<内容>

- ・舌下免疫療法のご案内
- ・そうだ！盛岡市検診を受けに行こう
- ・令和7年度通所リハビリテーション利用者満足度調査結果
- ・たねをまく人（連載小説） 北の文学84号掲載小説
- ・フィットネス体験実施中！

※ メディケアプラザ中央通りで咲く花たち

クリニック公式X →



メディケアプラザ中央通り

〒020-0021 岩手県盛岡市中央通り3丁目16-23

TEL : 019-654-3782 FAX : 019-654-3783

ホームページ <https://www.mpcyuo.jp> E-mail : mccyuo@tsunagi-hp.net



スギ花粉・ダニアレルギー性鼻炎でお困りの方へ

舌下免疫療法 のご案内



舌下免疫療法とは

舌下免疫療法とは、アレルギーの原因であるアレルゲンに体を徐々に慣らし、反応しにくい体質へ導く根本治療です。薬で症状を抑える対症療法とは異なり、長期的な体質改善による生活の質の向上が期待できます。スギ花粉症もしくはダニアレルギー性鼻炎と、検査により確定診断された方が対象になります。

治療期間は3年～5年間になりますが、継続することで効果が得られやすい点が特徴です。

服用期間はどれくらい？

1日1回、少量の治療薬から服用を始め、その後決められた一定量を数年間にわたり継続して服用します。初めての服用は、医療機関で医師の監督のもと行い、2日目からは自宅で服用します。



期待できる効果

長期にわたり正しく治療が行われると、アレルギーの症状を治したり、長期にわたり症状を抑える効果が期待できます。症状が完全に抑えられない場合でも、症状を和らげ、アレルギー治療薬の減量が期待できます。約80%の方に効果が期待できます。



副作用

- ・口の中の浮腫、腫れ、かゆみ、不快感、異常感
- ・唇の晴れ、のどの刺激感、不快感
- ・耳のかゆみ など

※症状の多くは服用後30分以内に現れ、自然に落ち着きます。初回投与後は30分間クリニックで待機していただき、重い症状(アナフィラキシー)などが起きた場合は、速やかに救急対応を行います。



舌下免疫療法に関する外来は、月・火曜日午前午後、水・木曜日午前に行っております。詳しく知りたい方はお気軽にお問合せください。

そうだ!

盛岡市検診を受けに行こう

無料

で受けられます



実施期間

6月23日(火)～10月30日(金)まで

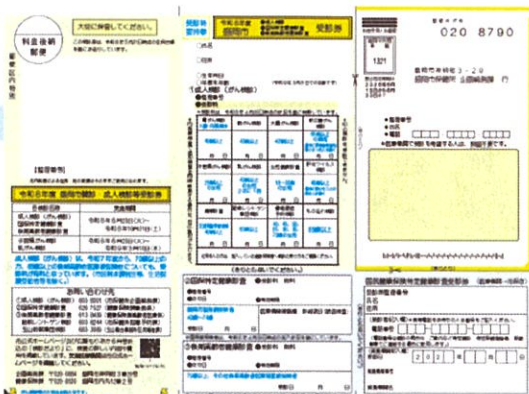
40～74歳 で盛岡市の国民健康保険加入者 ⇒ 国保の特定健康診査
75歳以上 で盛岡市在住の方 ⇒ 後期高齢者健康診査

が受けられます。

■検査項目

- 問診、計測 : 身長、体重、BMI、腹囲、血圧
- 血液検査 : 中性脂肪、HDLコレステロール、LDLコレステロール、肝機能、血糖、貧血、クレアチニン、尿酸等
- 尿検査 : 尿糖、尿タンパク
- 心電図・眼底検査 : 医師が必要と認めた場合のみ

※後期高齢者健康診査は腹囲、眼底検査を除いた項目です。



盛岡市から受診券が郵送で届きます。受診の際は必ずお持ちください。

成人検診(各種がん検診等)も一緒に受けられます。当クリニックでは、肺がん検診、前立腺がん検診、肝炎ウイルス検診、もの忘れ検診、女性健康診査が受けられます。こちらは**有料**となりますので、負担額は市のホームページをご確認ください。



ご予約・お問合せ



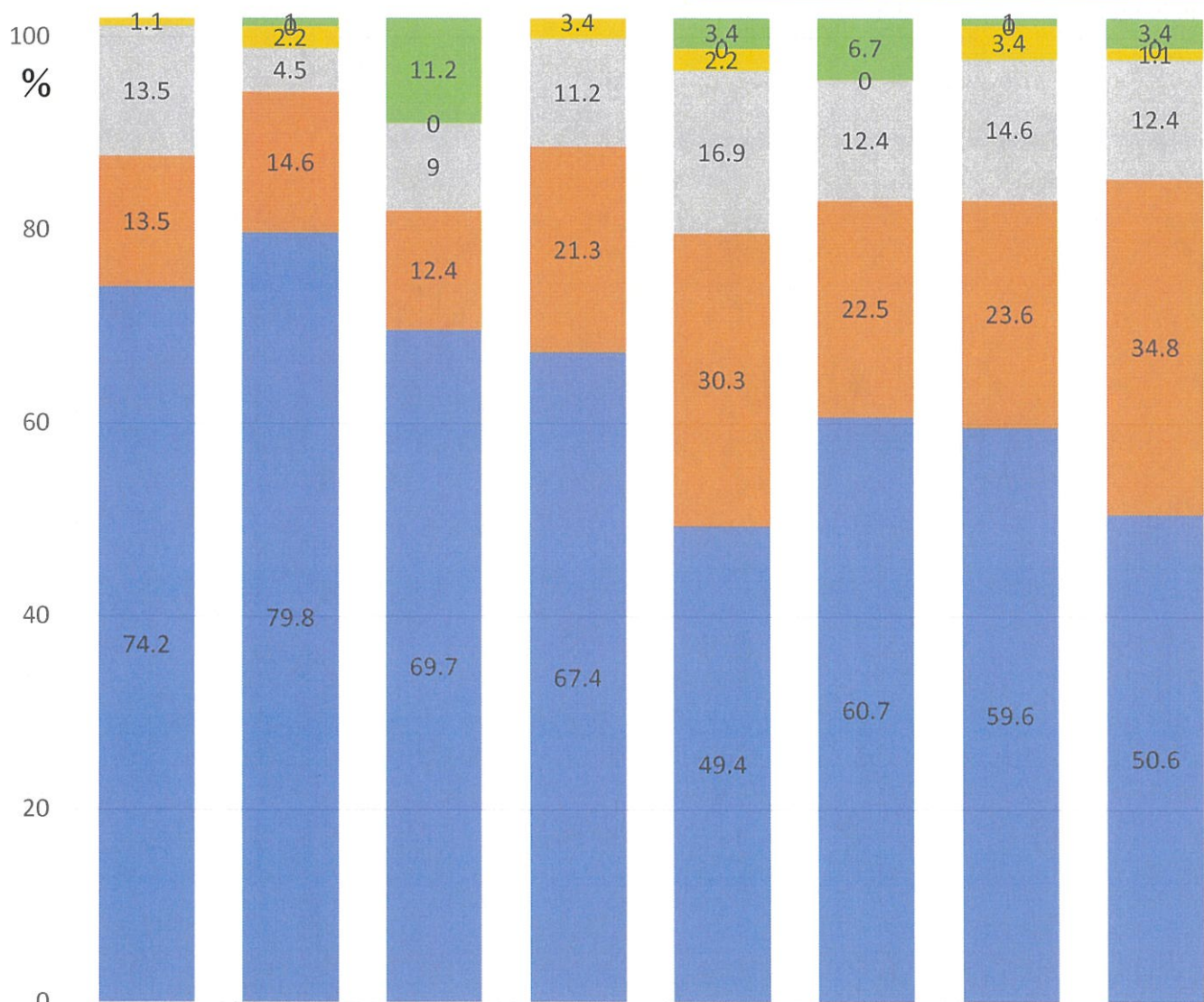
019-654-3781

メディケアプラザ中央通りクリニック

通所リハビリでは、利用者の皆さまに安心して通っていただき、より効果的なリハビリを提供するために、日々サービスの質向上に取り組んでいます。その一環として、このたび利用者満足度調査を実施し、日頃のご利用に対する率直なご意見やご感想を伺いました。

今回、普段のリハビリの様子やスタッフとの関わり、施設の雰囲気などについて、たくさんの温かい声や貴重なご意見をいただきました。いただいた声は、私たちにとって大きな励みであると同時に、改善すべき点を見つめ直す機会にもなっています。ここでは、調査結果と皆様から寄せられたご意見ご感想を紹介いたします。

調査期間 : 令和8年2月3日～2月28日
 回答 : 115名中92名回収 (回収率80.0%)



	設備・衛生状態	スタッフ対応	送迎対応・個別リハビリ	自主トレーニング	下肢循環・温熱	目的・目標に合ったリハビリ	リハビリの効果	
■ 無回答	0	1	11.2	1.1	3.4	6.7	1	3.4
■ 不満	0	0	0	0	0	0	0	0
■ やや不満	1.1	2.2	0	3.4	2.2	0	3.4	1.1
■ 普通	13.5	4.5	9	11.2	16.9	12.4	14.6	12.4
■ やや満足	13.5	14.6	12.4	21.3	30.3	22.5	23.6	34.8
■ 満足	74.2	79.8	69.7	67.4	49.4	60.7	59.6	50.6

皆さまからいただいたコメントを紹介します。

1, 施設の設備や衛生状態はどうか。

- ・窓が大きいので明るさ抜群で、気持ちよく取り組み、トイレの綺麗さは完璧です。
- ・消毒をもう少しマメにしてほしい。

2, リハビリスタッフの対応はどうか。

- ・日常会話を交えて健康状態等を把握してリハビリを行っている。
- ・目配り、気配り、皆さまに感謝です。

3, 送迎時の対応・運転はどうか。

- ・雨の日、雪の日も安全に送迎していただいて感謝です。
- ・笑顔で朝から接してくれます。

4, 個別リハビリの内容はどうか。

- ・その日の調子や要望を聞きながらプログラムを組んでいる。
- ・痛いところを重点的にマッサージしてもらえる。
- ・リハビリの時間がもう少し長ければと思うことが多い。
- ・毎回同じ内容ではなく、工夫をしてほしい。

5, マシントレーニングなどの自主トレーニングはどうか。

- ・自分で目標時間や負荷を決めてできるので、効果もあります。
- ・マシンの種類がもう少しあってもいい。
- ・機械の利用の待ち時間をなくしてほしい。

6, 空気圧マッサージ(下肢循環促進)や温め(温熱療法)はどうか。

- ・運動の間に休めていい、特に冬は身体のめぐりが良くなるように思う。
- ・数があと一つ増えてもいいと思う。

7, 自分の目的・目標に合わせたリハビリを受けていると思いますか。

- ・時々チェックをしつつ少しずつ改善している。
- ・もう少しリハビリの時間が増えてもいい。

8, リハビリの効果を感じますか。

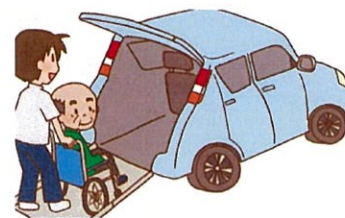
- ・一番に家族がリハビリをしてくると「姿勢」や「動き」が違うね、と言ってくれるのが嬉しいです。
- ・身体の状態もあり、なかなか効果を感じるまではいってないが続けていきたい。
- ・効果の有無は不明。

9, メディケアプラザ中央通り通所リハビリの良いところ

- ・困りごとなどを相談する時、専門家の視点でアドバイスを頂けるところ。
- ・家族への連絡を毎回記入して下さる。
- ・数種類のマシントレーニングと個別リハビリがセットで出来るところが良いです。
- ・全体として清潔感が強い、職員の方が頑張っている。
- ・町中で良い、通いやすい。

10, メディケアプラザ中央通り通所リハビリの改善したほうがいいところ

- ・寒い日の暖房が弱い
- ・いつもの療法士さんと違う療法士さんになった時、マッサージのやり方が違う時がある。
- ・マシンをもう一種類増やしてほしい
- ・ベッドの枕の共有のタオル交換、夏場は特に衛生面が気になります
- ・スタッフが少ない時、少し不安になります



6月から曜日変更となり、通所リハビリは月曜日～金曜日の営業となります。今回の結果や皆様から頂いたご意見を基に、更なる通所リハビリ運営にスタッフ一同精進してまいります。

たねをまく人

中村 均



前号からの続き

足元が心うつき、助けを求めるようにちらちら見るにつくんに、「大丈夫」「そつそつ」と声をかけ続ける。手伝ってあげたかったが、それ以上に一人で釣りあげてほしかった。やがて海面に大きな魚影が見えた。海面を叩きながら現れたのはアイナメだった。

「やった」
声を発したのはいつくんだった。
「すごいぞ。四十センチはあるぞ。やったな」
小さな体でよく釣った。俺は労うようにいつくんの肩を叩いた。いつくんは興奮冷めやらぬ表情で、太陽の光を浴びて黄金色に映えるアイナメを、目を見開いて眺めている。

「声、出たな」
俺はいつくんに言葉をかけた。いつくんはそのとき初めて気づいたようで、「えっ、えっ」と目をしばたかせ、「本当だ」と口元を押さえて言った。アイナメがごんごん滲んで輪郭を失っていく。

「あれ？ なんでだろう。止まらないや」
俺は突如溢れてきた涙の量に狼狽した。拭つても拭つても涙が溢れ出る。俺を呆然と見ていたいつくんも、鼻をすすり始め、やがて空を向き赤ん坊のように声を上げて泣き出した。俺はいつくんに反射的に抱きしめた。小さな体が全身で泣いていた。回した手に力を込めた。釣りあげた針に付いたままのアイナメが、堤防の上で踊るように跳ねていた。

秋の暮れ、風が冬の冷たさを帯び始めた十一月初旬、オープンして一週間が経つたばかりのダルマの仮設店舗に、夕方仕事終わりに立ち寄った。商店街にはダルマの食堂の他にもカフエや八百屋、理容店、雑貨屋など様々な店が集まり、多くの人が訪れ、街全体が賑わいを取り戻しつつあるように感じた。

ダルマの店は、昼の部は定食屋、夜の部は居酒屋と、昼と夜でメニューを変えて営業していた。

開店してから客足は上々のようで、二日前に顔を出したときも満席であった。夜の部の開店時間が迫っていて、ダルマは仕込みで動んでいた俺に気づくと厨房から手を上げた。横には奥さんとアルバイトの人もいて、鍋をかき混ぜたり野菜を切ったりしている。今日も完売したことを告げ、ふと店内を見回したとき、違和感を覚えた。二日前には冷蔵ケースの上には大きなダルマが鎮座していたのだが、なくなっている。そのことを訊くとダルマは「ああ、それな」と表情を曇らせ、理由を言う代わりに「今晚、ちよつとやらないかと、ジョッキを傾ける仕事をした。珍しいなと思いつながら俺は「いいね」と言った。
一時間後、一人で缶ビールと焼き鳥などのつまみを手に海へ歩いた。ダルマの奥さんが気を利かせてダルマを早く解放してくれたのだ。砂浜の海岸に流れ着いた丸太に二人で腰を下ろして月明りのおかげでわずかな光が地上まで伸びているもの、夜の海は日中と違い、果てしなく暗い。風が刺すように鋭さを増し、店へ飲むかと提案したが、ダルマは「今日は外がいい」と拒んだため、たき火をすることに決めた。探せばそこかしこに木の枝が落ちていて、集めてきてダルマが持っていたライターで火をつけた。徐々に大きな木を火の中に投入していつて、火が落ち着いてきたところで二人で乾杯した。ダルマはあつという間に缶ビールを飲み干すと、焼き鳥を頬張る。食べ終ると今度はジャンパーのポケットから小さなウイスキーの瓶を取り出し、そのまま胃に流し込んだ。ふうーと息を吐いて口を拭く。「大丈夫かよ」と問うが、低い声で大丈夫と言う。



二人の間でパチパチと火が弾け、火の粉が風に飛んで舞うのを二人で飽きもせず眺めた。「火を見てると落ち着くのはなんでだろうな」ウイスキーを流し込んで、ダルマが静かに言った。そつだなど俺は考え、「人間のDNAに組み込まれてるんだろうな」と言った。
「DNAか……」と呟き、ダルマが目を伏せる。いつもと違う様子にどうしたのかと問うと、「今日つもと口を開く。」
「向こうの海岸付近で見つかった遺体が、DNA鑑定で成田だと判明したって、成田の奥さんから電話がきたんだ」

焚火の炎に照らされるダルマは、手元にあるウイスキーに視線を注ぎながらも、その実は、何も見ていないような、遠い目をしていた。
「店に置いていたダルマは無事を願って置いていたものだ。でも願いは叶わなかった。だから今日撤去したんだ。こんなに行方不明者がいる中で、見つかっただけでもありがたいと思わなくちゃ駄目なんだろうけど、でも、やっぱりな……」

ダルマの店のスタッフだった成田という男が、震災後行方不明ということは弁当の移動販売ルートを教えてもらっていた日々の中で聞いていた。盛岡の店で採用され調理を担当していたが、東京の有名店で修行経験があり料理の腕が図抜けていたため、月に数回、海里町にも来てもらい、調理してもらったり、スタッフに料理を教えてもらったりしていた。あの日、海里町に来ていた彼は、ダルマが仙台出張で不在の中、自分以外のスタッフを先に避難させた。他のスタッフからは手伝おうとしたのだが固く断られたそつだ。最後に目撃されたのは、自分もすぐ行くからと言って、食器やグラスの破片を黙々と掃除していた後ろ姿だった。

「寡黙で責任感の強い男だったからな。あいつらしいといえはあいつらしいけど、俺がこちに連れてこなければ死ぬこともなかったんだ」
ダルマが天を仰ぐ。つられるように見上げれば雲が消え、空には星が瞬いている。
「結果論だろ。お前の責任じゃないよ」
ダルマは上着のポケットからたばこを取り出して咥えると、ライターで火をつけた。

「お前、たばこ吸うのか」
「いや、二十年ぶりだ」
俺は頭を素早く計算し、「十六歳以来かよ。野球部のとき吸ってたのかよ。普通に駄目だろ」と笑う。ダルマは軽く笑い、「好奇心旺盛だったんだよ」と言った。たばこの煙が行く先を迷うように左右に揺られて右へと流れていく。
「俺にもたばこくれよ」



そつと言つと、ダルマは自分が吸っていたものを俺に渡し、「何年ぶりだと訊く。初めてだ」と言つと、「マジか」と目を大きく開いて驚く。初めて吸つたばこは、煙を吸っているだけのようでもなかった。

「これはこつしよつぜ」と、俺はたばこを砂浜に差して立たせた。先端の炎が風でオレンジ色に燃える。「線香代わりだ」と言つて俺は手を合わせた。ダルマも遅れて手を合わせる。そして目を開けると、たばこの煙の流れゆく様子を眺めながら俺は言った。

「俺はなんとなく成田つて人の気持ち分かる気がするよ。何があったのかは分からないけど、その人もお前のおかげで何かが救われたんじゃないか。きつと感謝してたんだと思つぜ。だから逃げないで片付けをしてたんだろ。男つて、感謝していることを言葉で伝えることは苦手だけど、態度や行動で示すことはできるだろ。結果的にはそれが命取りになつてしまったわけだけだ、きつとお前に対して義理を通そつとしたんだよ」

「そんなもの……バカな男だ」
ダルマは嘆息した。焚火の燃え盛る炎と、たばこの小さな火を見つめながら、俺はいつになく心が凪のように穏やかだった。今なら普段なら言えないこともカツコツけずに言えそうな気がした。
「実はさ、俺は昔からお前が苦手だったんだ」
俺の口から唐突に言葉が吐いて出た。それでも俺の心は波立つことはなく静かだった。



ダルマは「何となく分かってたよと苦笑した。知ってたかと俺も苦笑し、話を続けた。」

「お前は俺と正反対だからさ、お前といると自分の駄目なところが浮き彫りになるんだよな。それが嫌で嫌でさ。俺はずっと自分という殻を守るためだけに生きてたところがあるけど、お前は他人のことにばかり一生懸命になってたよな。俺はそれが不思議でしょうがなかった。でも、今なら少し分かる気がするんだ」

「他人のために何かをするって、自分のためにするよりも嬉しいよな。喜んでほしくて、喜ぶ顔を想像して他人のために何かやるのって楽しいよな。俺はさ、今が一番生きてる実感があるんだ。お前のおかげだよ、ありがと」

俺は頭を下げた。心に抱いていた思いを口にして、吹きつける冷たい風が火照った頬に気持ちいい。ダルマは頭を下げたままで、つきり照れているのかと思っていたら、いびきをかきはじめた。

一緒に車でまわっていたときのことだ。ダルマは東京での仕事を辞めて海里町に戻ってきた理由を話してくれた。

当時、だるまはハウスメーカーの営業をしており、契約件数で何度もトップになり報奨金をたくさんもらっていた。だが、そのお金で高い車に乗っても、高級レストランで美味しいものを食べても、高層マンションに住んでもまったく面白くなかったそうだ。

どこかに穴が開いていて、水を入れても入れても心のコップは永久に満たされることはなかったという。そんなときに、偶然、東京でサンマ祭りが開催されていたのを見かけたらしい。海里町観光協会が主催したもので、そこには地元の人知った顔も何人かいたそうだ。そのときの彼らの表情が生き生きとしていたことや、東京の人が海里町のサンマを夢中でむさぼり食っている姿に、ダルマは故郷を誇らしく感じ、海里町に戻ろうと、そして海里町のために働くことと決心したそうだった。

ダルマの首がぐんと下がり、その反動で今度は顔を上げ、ハツとして目を開けた。目をこすり「寝てしまったと呟く。」

「飲みすぎじゃねえか。大丈夫か」「大丈夫だ」

ダルマは立ち上がる。海の方へとくらくらつきながら歩いて行く。寝ぼけてそのまま海へと入っていくのとは思い、俺は慌てて後を追った。ダルマは波打ち際で足を止めた。月明りにダルマの大きな背中が浮かび上がる。その背中が振り向いて唐突に言った。

「七転び八起き、だよな」俺は微笑み、親指を立てて「おう」と答えた。

＊

それからの十年、ダルマにとっては休むことなく駆け抜けた十年だったに違いない。仮設商店街の食堂を繁盛させ、商店街の会長として様々な企画を催し、また海里町の商工会青年部の部長も務め、音楽フェスティバルや花火大会の開催に尽力した。三年前、大型ショッピングモールができるって仮設商店街はその役目を終了し、店舗は移っていった。また、子どもたちが火付け役となり海里町内にブームを巻き起こしたのが、ダルマのストラップだった。街を歩けば、携帯電話やカバンにストラップをぶら下げて歩いている人の姿があった。一方、俺はいえは、ダルマの紹介で交際していた女性と五年前に結婚。二人で事業を引き継ぐ形で新たな弁当屋を始めた。昨年には家族が増え、四十五歳にして初めて男の子の父親となった。仮設住宅で三度寝をしていた頃、まさかこんな天からの贈り物があるとは思わなかった。すべはダルマのおかげだった。だから、もう感謝しすぎてはたかかった。胸が張り裂けそうだった俺は、外の空気を求め、逃れるように車を降り、球場へと入っていった。暗い通路を抜けると一気に光が降り注ぎ、広い球場が視界一面に迫ってきた。海里高校の快進撃にたくさん人の人が応援に駆けつけているように、一塁側の応援席はぎっしり席が埋まっている。俺は仕方なく三塁側の相手の応援席に座った。

試合は点を取っては取られの白熱したシーソーゲームとなり、九回表が終わったところで、海里高校が六対五とリードしていた。九回裏の相手の攻撃は内野ゴロであつたという間にツーアウトとなった。だが勝利目前にして力が入ったのか、連続四球で逆転のランナーまで出してしまふ。続くバッターは三遊間を抜ける痛烈なヒットを放ち、ツーアウト満塁となった。俺のいる三塁側、相手高校の応援団が逆転勝利を期待して盛り上がる。どうする、海里高校。ピッチャーはもう限界なんじゃないか。変えた方がいいんじゃないか。海里高校のベンチに視線をやったが監督はじつと腕組みをしたまま動く気配はなさそうだった。

と、そのとき、ベンチの奥に見えたものがあり目を見開いた。ベンチの真ん中に守り神然と大きな赤いダルマが置かれていた。左目にはじつかり黒目が描かれている。そしてマウンドに目を向け、そこで見たものに俺は鳥肌が立った。ピッチャーがプレートを外し、屈伸をした。一回かと思っていたら二回、二回かと思ったら三回、なおも続き、実に七回も屈伸をした。そして最後に大きく真上にジャンプした。

七転び八起き。あれは、あのピッチャーはいつくんなのか。十年前に小学校低学年なら、今は高校生なはずだ。釣りを一緒にした日以来、会うことはなかった。でも公園を通るたび、釣りをするたび、三月十一日が来るたび、いつくんを思い出した。

俺は出てもたつてもいられなくなる。隣の席の人にピッチャーの名を尋ねるが首をひねられる。そうだ、ここは相手側の応援席だ。俺は席を立ち一塁側へと急ぎ、座っている人にピッチャーの名を訊いた。

「佐藤たろう」なあと、腕つがしのいい男が周りに同意を求め、皆がうなずく。下の名は何か問うが、「なんだっけ。サツキだったかな」と首を傾げた。



サツキ？ 佐藤サツキではあだ名がいつくんにはならないだろう。ならばあれはいつくんではないのか。呆然としていると、後ろから「おい、見えないぞ」と声がした。通路の階段に立っていた俺は慌ててその場にしゃがんだ。金属音がした。歓声が上がった。ファールボールがバックネットに突き刺さる。

「サツキじゃねえよ。五月って書いてイツキって読むみたいだ、ほら」腕つがしのいい男の前に座っていた男が、スマホで調べてくれたように画面を見せてくれる。そのスマホにはダルマのストラップがぶら下がっている。

「イツキ。そうだ、イツキだからいつくんなんだ。よくぞここまで……。長く吐いた息が震えた。胸の前で両の手を重ね合わせる。力を振り絞れ。勝て。俺は男のスマホに付いていたストラップのダルマに勝手に念を送り願いを込める。二球目のストリートにバットが空を切った。あと一球だ。ダルマ、見てるか。俺は心の中で話しかける。お前はいろんな人の心に種をまいていたんだな。やつぱりお前はすごい奴だよ。」

思い出した場面があった。三年前、大型ショッピングモールがついにオープンする日のことだ。マスコミが多く駆けつけていて、ダルマは柄にもなく緊張していた。店の取材を受けていたダルマが、自分の店舗に置いた大きなダルマについて「私にそっくりでしょう」と言った。リポーターは笑った。

「この大きなダルマにも左目に目が入ってますね。どんな願いを込めたんですか」「それは……」

ダルマの顔がアップになった。力強い眼差しをカメラに向けてこう言った。「海里町の、そして海里町みんなの、復興です」三球目のストリートが高めに浮いた。だがバットは空を切り、キャッチャーミットにボールが吸い込まれた。勝った。いつくんが両手を突き上げ吠えた。応援席のみんなが立ち上がり絶叫する。俺も周りの男たちと抱き合っていた。歓喜の渦の中で、俺は思った。ダルマの願いを引き継がなくては、と。今は悲しみに暮れようとも、そう思う人はきっと海里町に多いはずだ。それほどあいつはたくさんの人にたくさん種をまいたのだから。

※この内容は若手日報社の許諾を得て、北の文学第84号より転載しています。

フィットネス 体験実施中!

6月は
体験料 1回700円 ⇒ **0円**
入会金 5,000円 ⇒ **0円**



■ 時間: 13時30分～14時50分

月曜日: マシントレーニング
水曜日: ピラティス

火曜日: 軽いエアロビクス
木曜日: 座ってできる筋力トレーニング

利用者様の声



佐藤 忠行様・和子様 ご夫妻

— フィットネスを始めたきっかけは? —

かかりつけ医としてお世話になっていきます。クリニックの待合室でパンフレットを見かけたのがきっかけで、近くでもあるので、妻と一緒に週二回、楽しくお世話になっております。

— フィットネスは何年くらい通っていますか? —

約五年になります。
— どういった内容のトレーニングをやっていますか? —
月曜日はマシンを中心に筋力トレーニングをしています。木曜日は椅子を使った体操と筋力アップ運動です。

— 通ってみて何か変化はありましたか? —

週に二回通うことで、メリハリ(規則性)のある生活習慣が確立されました。また、血糖値や血圧の数値も徐々にではありますが、改善が見られてきています。

— インストラクターの対応は、どうですか? —

研鑽に励まれている様子が窺える真摯な対応に好感が持てます。

— これからの目標などあれば教えてください。 —

郷土(奥州市)の偉人、後藤新平(元東京市長)の遺訓に「人のお世話にならぬよう、人のお世話をするように」と云うのがあります。この言葉をモットーに、誰しも避けられない老いではあります。できる限り人様に迷惑をかけないよう、健康寿命を心がけ、当フィットネスに通いながら、与えられた余生を妻とともに楽しんで暮らしていけたらと思っています。

◆ 編集後記 ◆

▶ 今号では舌下免疫療法を取り上げました。スギ花粉やダニアレルギーでアレルギー症状に苦しんでいる方は、ぜひ一度受診してみてもいかがでしょうか。▶ 通所リハビリテーションは6月から月曜日～金曜日の営業に変わります。満足度調査の結果は概ねよいものでしたが、驕ることなく、いただいた声に真摯に耳を傾け、よりよいサービスの提供に努めていきます。▶ フィットネスは月曜日から木曜日まで様々な年代の方がトレーニングに励んでいます。今回利用者様の声としてあげさせていただいた佐藤様ご夫婦は、以前、当院の先生に手術してもらったことがあるそうで、「縁ですから」と、快く掲載に協力してくれました。ありがとうございました。(中村)

メディケアプラザ中央通り

〒020-0021 岩手県盛岡市中央通り3丁目16-23

◆ クリニック TEL: 019-654-3781 FAX: 019-653-1355

◆ 介護事業 居宅介護支援事業所・通所リハビリテーション・訪問リハビリテーション

TEL: 019-654-3782 FAX: 019-654-3783

<https://www.mpcyuo.jp>

